

人工物が問題になる場合

齊藤了文 (Norifumi Saito)

関西大学 社会学部

はじめに

人工物は哲学において特に問題とされない、ことはよくある。その理由の一つとして、所有権を挙げたい。それによって、人工物は所有者のコントロール下に置かれるものと見なされる。ハサミのような道具なら、使い手である人間は社会において問題ではあっても、その人が使うハサミが、どこ製であろうが、使い勝手がどうであろうがたいして問題はないことが多い。ハサミで他人を傷つけるという非倫理的な行為があった場合、その行為者は非難されるが、ハサミそのものには（証拠品として以外には）特に関心をもたれない。

所有権は所有物が所有者のコントロールに置かれるということを意味する。このときに、所有物は所有者の意のままになるとみなされているのだろう。例えば、児童ポルノのように子供をモノ扱いしていることは非難の的になる。ただ、物そのものが所有者の好きなように扱われることについては特に問題は感じられていない。

また、高度成長時代やバブルのころのお金持ちなどが高価なモノを持っていても、それはその人に対する嫉妬や恨みや侮蔑の評価はあっても、物そのものは人間に対する評価とは一線を画している。それは、行為者は人間であって、物は所有されるものであって、財という価値はあっても、それ以外の評価を受けることはなかったからだろう。そして、この場合のモノは、自然物でも人工物でも特に関係はなかった。

現代の状況

交通事故に関わる人工物は、法の実務に大きな影響を与えてきた。私の馬が人を蹴ったら、私が謝るか蹴られた人が泣き寝入りをするかだろう。自動車事故では作った人（一人では作れない）や管理者、実際にメンテナンスしていた人など、多くの人、しかも多様な貢献をする人が関与する。電化製品でも因果関係が複雑になり（関与する人の多さ）責任関係も複雑になる（雇用者、被用者、下請けなど）。所有物は、所有者がどのように処分することも許されるものだった。所有権と最終的に手を下した行為者だけを問題にすると、自動車事故においても、倫理関係が分かりにくくなる。これが人工物と共に暮らすことによる問題である。

さらに、自動車にせよ家にせよ、作って何年もして問題が生じることもある。作った人が時限爆弾を仕掛けていたのではなく、作るのに関わっていた人の誰かがミスをした、過失を犯したことによって事故が起こることがある。

また、自動車の出会いがしらの事故のように、ドライバー同士のちょっとしたミスや勘違いで「人に迷惑をかける」ことが生じる。倫理的にまた法的にも位置づけの難しい過失に焦点が合うのが人工物と共に暮らす世界の問題だ。

この意味で工業製品としての人工物は問題になる。だから、ハンマーのような人工物

は典型例でなく、匠の技は人工物の認識論の典型だとは思えない。

設計意図

さて、設計は人工物を特徴づけるだろう。しかし、人間が自然に介入したか、自然そのままであるかが問題ではない。地表で人間が関与、利用するものの多くは人間の介入がみられる。その時、設計という少し奇妙な意図的行為が見られるのが人工物だと捉えられる。橋の設計や IC チップの設計、さらには制度設計において、設計者は因果関係のある程度見通して人工物を作り上げる。

自然は神による意図の発露かも知れないが、それと対比すると人工物は人間の意図の発露であるはずだ。しかし、人工物は意図が目に見えるはずだが、それも単純ではない。「作った人は、作られたものをすべてコントロールできる」わけでもない。電腦将棋はその作成者よりも強い打ち手になっている。

法律でも、例えば民法起草者の見解が、法解釈の基準となるとは限らない。その他の法源に照らしあわされて、民法の解釈が行われることもある。作った人の意図が常に維持されているわけでもない。

行為者をつくる

作る場合にも、所有権で対処できればいいが、そうでなくて他の権利、関与者が関わらざるを得ないことが生じている。これが、人工物の扱いが難しくなる条件である。

さらに、人工物と言われるものが「行為者」と見做されることが生じると更に問題が複雑になる。

まず、法人が社会生活における主体となる。(法人の理論構成は、国家とも重なる。) さらに、株式会社では、オーナー、株主と経営者とは別人であることが普通である。このタイプの人工物(所有権では済まない主体となりうるもの)と共に我々は社会生活を送っている。

そして、実現していないが、意思を持つロボットとか、人工生命も行為者の枠組みで問題となる。

もちろん、現在の場合でも、自動停止する自動車とか遺伝子の組み換えによって変異された生命体といったものがある。これらは、人間が造ったものはコントロールできる、というイメージを超える。意図の実現を目指したがそれを超える副作用が生じた。このポイントも含んだ人工物を我々は実際上作っている。これは、人間の認識能力の限界であるとともに、人工物を新たに存在させた時に基本的に存在する問題である。

人工物の科学的方法論

こうすると、複雑な人工物をどう作るかを踏まえて、それをどう改変してくか、ということが大きな問題となる。(設計、製造と並ぶ工学の柱である)メンテナンスの観点が必要になるのが、人工物を扱う方法論のポイントとなる。理想化による科学的理解を目指すより、境界条件の変化に対応することが工学の姿である。